



MENU

ブレンドコーヒー
アメリカーノ
カフェラテ
プチーノ

¥450
¥450
¥550
¥550

キャラメルラテ
抹茶ラテ
本日のコーヒー
ケーキセット

情報格差

トイレ盗撮で暴かれる、
あの人の知られたくない姿

隙間売ト 作

本日のおすすめ

森のラテ
¥650

R18

情報格差
——トイレ盗撮で暴かれる、
あの人の知られたくない姿

隙間売ト
作

第一章 発見

「いらっしやいませ。ご注文はお決まりですか？」

広瀬亘（ひろせわたる）は、返事を忘れた。

白いシャツ。黒いスラックス。胸元には、見慣れた『フォレストコーヒー』のロゴ。

そして、その横。小さなネームプレートに刻まれている二文字を、広瀬はもう一度読んだ。

『中村』

間違いない。

猛烈な喉の渴きを感じた。

「……アイスコーヒーを」

「かしこまりました」

『中村さん』は何事もなかったように注文を復唱し、レジへ視線を落とした。
その横顔を見ながら、広瀬は三日前の夜を思い出していた。



始まりは、一本の動画だった。

深夜。仕事から帰った広瀬は、いつものように会員制のアンダーグラウンドサイトを眺めていた。

新着欄に並ぶ動画を、特に見当もつけず、一つずつ開いていく。

その中の一本で、広瀬の指が止まった。

個室へ入ってきた若い女性。

白いシャツの胸元に、見覚えのあるロゴがあった。

『フォレストコーヒー』。

広瀬が仕事帰りに何度も利用している、駅構内のカフェだった。

さらに女性がわずかに顔を上げる。

広瀬は思わず再生を止めた。

「……え？」

見覚えがある。はつきり記憶しているわけではない。名前も知らない。

カウンター越しに何度か接客されたことがある。ただそれだけの女性だった。

動画を数秒巻き戻す。

胸元を拡大する。

小さなネームプレートには、辛うじて二文字が読めた。

『中村』

嘘だろ。

広瀬はそこで動画を閉じた。

その先を見ることが、急に怖くなった。他人の空似かもしれない。AIで作られた映像なのか
もしれない。

何より、もし本当にあの店員だったらー。

あの店員は『中村さん』という名前なのか。

それを確かめるまでは、続きを見てはいけないような気がした。

その夜は、別の動画で済ませた。それでも絶頂の瞬間、脳裏に浮かんだのは、途中で閉じたあの女の顔だった。



「お待たせいたしました」

声に引き戻された。中村さんがアイスコーヒーを差し出している。広瀬は震えそうになる手で受け取った。

声も同じだった。

顔も同じだった。

名札も同じだった。

三日前、画面の中で一時停止した女性が、今、自分の目の前に立っている。

「ありがとうございます」

中村さんはもう次の客へ視線を移していた。彼女にとって広瀬は、今日何人目かの客でしかない。

だが広瀬にとっては違った。店を出た瞬間、歩調が速くなった。

本物だった。あれは、本当に彼女だった。

アパートへ帰ると、靴もまともに揃えずに部屋に転がり込んで、PCを起動した。

三日前に閉じた動画を探す。

サムネイルを見つけた瞬間、心臓が大きく鳴った。

三日前とは違う。

あの時、画面の中にいたのは「見覚えのある女」だった。

今は違う。

数十分前、自分にアイスコーヒーを渡した中村さんだ。

広瀬は再生位置を最初へ戻した。

クリックする。動画が始まった。

数十分前、自分にコーヒーを渡した女が、画面の中にいる。

「やっぱり……間違はなく、彼女だ……」

湿った六畳間の暗がり、液晶画面が青白く光る。

いま行っているのは、もはや疑惑の確認ではない。神聖な偶像が完全に崩壊し、一人の生々しい「生き物」として堕ちていく瞬間を、つまみ食いどころではなく、誰にも邪魔されずに貪り食う。ただそれだけだった。

数十分前、仕事帰りに立ち寄った駅構内のカフェ『フォレストコーヒー』。そのカウンター越しに、注文を復唱してくれたアルバイト女性の声、切れ長の目元、ピンと伸びた背筋の緊張感――それらの記憶が、今日の前のモニターに映し出された映像と、寸分の狂いもなく一致している。

店へ足を運んだのは「確認」のためだった。そして今行っているのは、逃れようのない「収奪」だった。

画面の中で身を縮めているのは、間違いなく彼女――広瀬が日々の単調な労働に耐えるための唯一の気晴らしとして行きつけにしている、あのカフェの女だった。

胸元に小さく光るネームプレートには、まぎれもなく『中村』の二文字が刻まれている。だが、映像の中の彼女は、客の前で見せるあの凛とした、清潔感あふれる微笑を完全に失っていた。

一人のときはこういう顔をするんだな……。中村さんは、自分が何者かの悪意そのもののレンズに捉えられていることなど、知る由もない。それもそのはずだ。背景に映っているのは、トイレの個室の中なのだから。

とある会員制裏サイトからダウンロードした最新の「トイレ盗撮動画」。

もしこれがAIによるフェイク画像であれば、どれほど救われただろう。しかし、控えめな光量のLEDライトが湿ったタイルに反射する冷たいちらつき。スラックスと下着が擦れ合う生々しい摩擦音。そして彼女から漏れる微かな吐息。すべてが、加工などではない残酷な現実を突きつけていた。

指先が凍りついたように震え、広瀬は思わずマウスをクリックして一時停止を押した。

「中村さん……どうして、こんなことに……」

工場の機械音よりも激しく、心臓が肋骨の内側を乱打する。

額から冷たい脂汗が滲み出る。ただの客と店員にすぎない。下の名前すら知らない。だが、この瞬間、彼女が世界で最も無防備で、他人に見せられない行為を晒されている事実を知っているのは、自分だけなのかもしれない。

警察に通報するべきだろうか。彼女に危険を知らせるべきだろうか。モラルは下腹部からせり上がってきた濁った熱情によって粉々に打ち砕かれた。広瀬はかわききった唇を舌で濡らし、震える指先で再び再生ボタンを押した。

動画は、個室内の正面のどこかに仕掛けられたカメラのアングルから始まっていた。

個室の薄暗がりの中、清潔な白シャツに包まれた中村さんの身体がゆっくりと前に傾く。黒いスラックスのホックを外し、下着ごと太腿の半ばまで一気に引き下ろす。露わになった下腹部と腰の滑らかな曲線、肉付きの良い太腿の白さが、薄暗い空間にぼんやりと浮かび上がった。

彼女はそのまま、深く腰を落として和式便器を跨ぎ、しゃがみ込んだ。

顔は正面から完璧な構図で捉えられている。

切れ長の目にずっと通った鼻筋。かなり明るめの茶髪。化粧が上手な女だ、と思う。しかし画面に映る表情に、営業用の作り笑いなど微塵もない。重たげな瞼が伏せられ、焦点の定まらない瞳がただ前一点を見つめている。何も考えていないような、ぼんやりとした奇妙な無表情。

至近距離のレンズは、制服の肩が呼吸に合わせて小さく上下する様や、鼻腔が微かに広がる瞬間までも克明に記録していた。

彼女の華奢な手が、壁の擬音装置のセンサーを覆う。ゴォーツという激しい水流の音が狭い個室に反響した。

音消しの水が流れ始めた瞬間、彼女の所在なげな表情がふっと緩んだ。

直後、水の轟音の隙間を縫って、便器の底を鋭く打つ「チーツ」という甲高い放尿音が、PCの安物のスピーカーから漏れ聞こえた。

「っ……………」

広瀬は息を呑んだ。

前傾した上半身の影になり、正面カメラからは肝心の局部は見えない。しかし、彼女の口元から細い息が洩れるその瞬間、まぎれもない排尿の生々しさが広瀬の鼓膜と視覚を激しく揺さぶった。密閉された安アパートの六畳間に、ありもしない生暖かい尿の匂いの気配が立ち込めたような錯覚すら覚える。

だが、撮影者の執念はそれだけにとどまらなかった。

唐突に画面が切り替わる。

カメラは二台仕掛けられていたのだ。

もう一台は便器のすぐ後方、床の排水口のどこかに仕掛けられているのか、すれすれの死角から、彼女の下半身を煽るように捉えていた。

和式便器の構造上、深くしゃがみ込んだ中村さんの丸みを帯びた臀部が、画面いっぱいに大写真になる。

引き下ろされた下着の向こう側、左右に大きく開かれた肉付きの良い太腿の奥底で、手入れのされていない自然な茂みと、縮こまった性器が完全に剥き出しになっていた。

その蕾が内側からの奔流によって開かれると、勢いよく噴き出した黄金色の液体が、便器の白い空間へ向かって、下品に叩きつけられている。激しく跳ね上がる飛沫が、逃げ場のないほどの解像度で克明に焼き付けられていた。

「うそだろ……中村さん……ここまで……」

広瀬の喉から、掠れた呻きが漏れた。

カフェの看板娘が、もつとも原始的で生理的な行為のさなかにいる。

しかし、映像の悪夢はそこで終わらなかった。

排尿が収まった後も、彼女は立ち上がろうとしない。

背中を丸め、両手を前の方にやって、腰を落とす。下腹部にぐっと重い力が込められる。

直後、ボトツ、という鈍く重い水音が、静まり返った個室内に響き渡った。

後方カメラが、便器に落ちる茶褐色の重々しい塊と、それに伴って微かに窄まった肛門の震えを余すところなく捉えている。

再び画面が切り替わり正面の映像に戻る。

中村さんの口元がだらしなく半開きになった。焦点の合わない虚ろな瞳で宙を仰ぎ、深く、長い吐息を漏らす。理性で制御することのできない、お腹の圧迫から解放され、成し遂げた達成感に身を委ねた、完全に放心の表情がそこにあった。

なんだ、この顔は……。

この顔は、排泄そのものよりも赤裸々だ。

「……女の人って……こんな『アへ顔』でするんだな……」

広瀬の口からその言葉が漏れたのは、幻滅の意味ではなかった。

逆だ。

勝利だった。

全身の血管を愉悦が駆け巡るような、狂おしいまでの歓喜だった。

工場の油にまみれ、誰からも気に留められない。代わりはいくらでもいると使い捨てられる四十歳。そんな無力な自分が、今、自分と同じように血の通った、そして自分以上に若さと美しさという長所を備えた、働くお姉さんの、最も秘匿されるべき真実を手に入れた。

神聖な偶像が泥水の中に堕ち、自分と同じ、いやそれ以下の卑俗な生き物として晒された瞬間、広瀬の脳内ではドパミンが津波のように溢れ出していた。

ズボンの前を乱暴に引き下げ、広瀬の右手が狂ったように動き始めた。

モニターを凝視する自分の顔が、液晶に醜く歪んでいるのが見える。その顔は、理性の皮が完全に剥ぎ取られ、ただ一つ、抑えようのない性欲だけが剥き出しになった顔だった。

シークバーを巻き戻し、黄色い尿線が迸る瞬間、そして重たい排便の音と共に彼女が放心に目を泳がせる決定的な刹那を、何度も、何度もリピートする。

「中村さん……っ、中村さん……！」

その声は彼女の魂を底辺に引きずり込む呪詛のようだった。

突き上げるような激烈な予感が限界に達し、広瀬は喉の奥で獣のような咆哮を上げながら、左手に用意したティッシュの中に熱くドロリとした汁を勢いよくぶちまけた。

下半身の神経が痙攣し、足の指先までもが痺れるほどの圧倒的な爽快感が押し寄せる。四十年生きてきて、これほどまでに脳を破壊されるような射精を経験したことはなかった。

だが、賢者タイムと呼ばれる静寂は訪れなかった。

荒い息を吐きながらモニターを見つめ直した瞬間、画面の中で再び無心に腰を浮かし、トイレットペーパーで陰部を執拗に拭う中村さんの姿が目に入った。濡れた肉が紙を滲ませる生々しい音。

罪悪感が深くなればなるほど、喜びは甘美さを増していく。

「……もう一回だ……まだ終われない……今度はウンコだ……」

いくら綺麗な女性とはいえ、人様が排便している姿で、自慰をする異常さに広瀬は自分のことながら慄いた。

震える手でマウスを握り、再び、動画の最初へとカーソルを戻した。

二度目の絶頂が、繰り返す嵐のように彼の疲れ切った肉体を蹂躪していった。四十歳の肉体が快楽の深淵を覗き続ける。

二度目の射精を終えたとき、部屋の空気は広瀬自身が出した精液の生々しい匂いと、画面から漂ってくるような錯覚に満ちた排泄の幻影で濃密に淀んでいた。

力なく垂れ下がった右手をキーボードの上に投げ出し、広瀬は虚ろな目で暗転した画面を見つめた。

明日もまた、あの駅のカフェへ行くだろう。彼女は何か食わぬ顔でカウンターに立ち、「いらっしやいませ」と清潔な笑顔でアイスコーヒーを差し出すはずだ。

自分は、もう二度と、昨日までの自分には戻れない。

その服の下に隠された白い尻も、排泄の瞬間に見せる締まりのない、だらけた表情も、性器の形も、音消しを飛び越えて耳に届いた音色も、すべてを知っているのは世界中で自分だけなのだ。彼女が知らぬ間に結ばれてしまった、あまりにも一方的な関係。

底なしの沼に身体の半分以上を沈み込ませながら、四十年の人生で初めて、自らの魂がどす黒く脈打ち、圧倒的な生の熱狂に震えているのを感じていた。

第二章 中村さん

作業着に染み付いた機械油の匂いは、いくら洗濯しても完全には取れない。

その匂いは自分の体臭と同化して、この工場内で、匂いも含めた人格を形作る。

昨日までと同じはずの工場の景色が、今日はひどく遠い世界の出来事のように感じられた。作業台の上に置かれた金属パーツ。広瀬の仕事は、その金属パーツをひたすら組み立てて、それより多少複雑な金属パーツにすることだ。

だが、鈍く光る金属を見つめているはずの目には、不意に、便器の白さと、その上で気張っていた身体の質感が割り込んでくる。

……っ！

マウスのホイールを転がし、シークバーを操作し、狂ったように手淫していた時の、あの気持ちよさ。

「おい、広瀬。手が止まってるぞ」

班長の声に肩を跳ねさせ、慌てて視線をパーツに戻す。額から流れた冷たい汗が、防護メガネの縁を濡らした。

昼休憩の食堂。隣に座った同僚が、作業着の股を広げてどつかと椅子に座り直した。

ただそれだけの、男だらけの職場ではありふれた光景。

目の前の光景は、どこまでも灰色にくすんでいた。埃っぽい空気、錆びた鉄の匂い、疲れ切った中年男たちの呟き。まずい日替わり弁当。すべてが虚しさに満ちている。

一方で、モニターの中で見た「あれ」は、どうしてあんなにも艶やかで、生命の拍動に満ちていたのか。排泄という、本来なら隠すべき行為。それが、皮肉にもこの死んだような日常よりもずっと「生きている」実感を伴って、広瀬の神経を逆なでしてくる。

鮮明すぎるコントラストに、激しい眩暈を覚えた。

視界が歪む。足元がふわふわとしている。切羽詰まっている。

早く、見たい……。

もう、隠しようもなかった。広瀬の心はすでにこの工場にはない。ボロアパートの、あの青白い光を放つモニターの前。中村さんの自我が及ばない、あの聖域の断片に、広瀬の魂は完全に囚われてしまっていた。

タイムカードを押す音が、いつもより鋭く鼓膜を突いた。終業のチャイムが鳴り響くと同時に、溜まっていた抑圧が限界を超えた。もう、一刻も猶予はなかった。

『フォレストコーヒー』に行ってみよう。彼女がシフトに入っているかもしれない。

……行ったところで何が起きるわけでもないのだ。自分に言い聞かせる言い訳は、もはや形骸化していた。しかし会いたい。

スマホで天気予報をチェックすると、画面には雨雲のアイコンが並んでいる。外はあいにくの雨模様。だが、胸の中で暴れる鼓動は、そんな湿り気を吹き飛ばす雷鳴のように激しく鳴り響いていた。

雨など、もはや問題ではなかった。

ロッカーから引っ張り出した雨合羽を適当に羽織り、広瀬は弾かれたようにバス停へと走り出していた。

停留所の度に、カーブを曲がる度に、不規則に揺れる車内の吊り革。

窓ガラスに映る自分の顔を盗み見ると、そこにいるのは見慣れた四十歳の冴えない男ではなく、ギラギラとした瞳の、見知らぬ他人のように感じられた。

……もし、今の俺の頭の中を誰かに覗かれたら？

喉の奥がカラカラに乾いている。背徳感と、爆発せんばかりの高揚感が、広瀬の背中の上で手を取り合って踊り狂っている。

トイレ盗撮動画に映っていた本人に会いに行く。それを他人に知られたら？ これは本当にいけないことだ。これが突撃というやつだろうか。今初めてその気持ちが分かった。

バスのドアが開いた瞬間、湿った空気が肺に流れ込む。

さあ、いよいよだ。

あの動画の「現実」が、今も、この駅のどこかに存在している。

自分だけが知っている、あの無防備な姿を隠したまま、彼女は今日もコーヒーを淹れているはずだ。エスカレーターを駆け上がりながら、広瀬は確信していた。

もう二度と、「ただの客」の立場で彼女を見ることはできないのだと。

濡れた通路を重い足取りで踏みしめ、緑色の店のロゴが見えた瞬間、心臓が口から飛び出しそうになった。

「……っ」

一步、足が止まる。

冷静になれ。何を期待してるんだ？

理性がブレーキをかける。けれど、内側から突き上げてくる欲望は、防波堤を軽々と超えていく。濁流となって広瀬を押し流す。もはや抵抗すること自体が滑稽にさえ思えてきた。

ただ一度でいい。遠くからでいい。

あの動画の中の「彼女」が、今日も本当にこの現実の世界に、地続きで存在しているのか。それを、この目で確かめなければ。

店舗正面の大きなポスターの前に立った。暖色の照明に照らされた、見慣れたブレンドコーヒのサンプルや、季節限定のケーキ。そのガラスの向こう側、整えられた空間に、彼女はどんな空気を纏って立っているのだろうか。

今日、中村さんはシフトに入ってるだろうか……？ 盗み見るような、卑屈で鋭い視線を店内に滑らせる。

カウンター席では大学生の二人組が楽しげに談笑している。窓際ではサラリーマンが眉間に皺を寄せてノートPCを叩いている。

……いない。

レジ周辺をくまなく探したが、そこに中村さんの姿は見当たらなかった。

瞬間、張り詰めていた糸が切れたような安堵が胸をかすめる。同時に、肩透かしを食らったような、耐え難い落胆が胃の奥を重く沈ませた。

休みか……。それとも、今は奥のキッチンに……？

どちらにせよ、確かなことが一つだけあった。

この自動ドアの向こう側で起こっていることと、あの動画は、同じ世界の出来事だ。

あの白く震えていた肌も、飛沫を上げていた奔流も、そしてあの「アへ顔」も。すべてがフィクションではなく、この世界の片隅で、この街の空気の一部として確かに息づいているのだ。

それは唯一無二の真実であり、これ以上ない宝物であり、そして逃れられない呪いでもあった。

中村さんの姿を見たかった……。今日は見たかった。

不在を確認したことで、逆に飢餓感は限界まで膨れ上がった。

広瀬はカップを小脇に抱えたまま、湿気に滲むような店内の明かりを、食い入るように見つめ続けた。

姿が見えないからこそ、頭の中では昨日の映像が、現実の風景を侵食するように、より鮮明に再生され始めていた。

あの映像の中とは違う、「表向き」の顔をこの目で捉えたいという切望。それが果たして叶うかどうかは別として――少なくとも今の広瀬にとって、この渴きを癒やす最良の選択肢には違いないと思われた。

もう、いようがいまいが関係なかった。ここに来て、店に入らずに帰ることなどできなかった。

「いらっしゃいませ」

自動ドアが開くと同時に、店員の挨拶が重なる。肩を弾ませるほどに昂ぶった鼓動は、一向に落ち着く気配を見せない。

ふう……。

一度深呼吸を挟み、沸き立つ熱を無理やり胃の底へ押し込めると、勇気を振り絞るようにして、カウンターに向かって、緊張しながら、広瀬は一步を歩み出した。

「いらっしゃいませ。ご注文ですか？」

店員の挨拶に意識を向けずとも、空気の密度が違うことを感じていた。

いない。

カフェ特有の、焙煎された豆の香りと、微かに漂う清潔な洗剤の匂い。その中に紛れているはずの、彼女の存在を探し求める。

広瀬はぶつきらぼうに「アイスコーヒーを」と言って、支払いを済ませ、トレイを受け取る。

……いないのか？

レジカウンター、そしてフロアの隅々まで目を凝らす。目当ての中村さんの姿は現れない。心臓の音だけが、期待と失望の狭間で激しく刻まれていた。広瀬は寂しさを噛み締めながら、その一角へと座ろうとした。

その瞬間だった。胸を焦がすような寂しさを感じながら、その一角の席へ座ろうと思った矢先

――

中村さんだ。

「あっ……!？」

突如、視界の端に入ってきたその動きが、広瀬の視覚へと鋭い刺激を叩き込んできた。邪な気持ちを抱えたまま、その方向へ顔を向けることを躊躇わせるほどの強烈な引力。見たい。見てしまおう。抗いようなない本能に突き動かされ、遂にその正体を直視すれば、そこにはまさに探し求めていた人物がいた。

彼女はちょうど、テーブル席の客に、注文後に席へ届けることになっていた、手間のかかる飲み物を運んでいるところだった。

白いシャツに、黒いスラックス。

あの動画で見た、あの時と全く同じ服装だった。トレイを持つ華奢な背中が、歩みに合わせて前後に揺れている。ほとんど金髪寄りの艶やかな茶髪は、仕事の邪魔にならないよう首の後ろで

一つにまとめられている。その足取りは落ち着いていて、周囲の慌ただしい店員たちよりも、どこかベテランの余裕を感じさせた。

ああ……本物だ……。

思わず、肺のすべてを空気で充満させるように息を吸った。

画面越しではなく、今、確実に広瀬と同じ空気を吸い、目の前に存在している。

画面を見ていた時は、どこか遠い世界の、非現実的な出来事のようにも思えた。けれど、今こうして現実には、三次元の肉体として動いている中村さんを目の当たりにして、改めて心臓が跳ね上がる。

自分は、とんでもないものを目撃してしまったのだ。

同時に、広瀬を打ちのめしたのは、その姿があまりにも「普通」で、あまりにも「いつも通り」であることだった。

落ち着いた振る舞い、客への接し方。こんな何でもない日常の、平穏な時間の裏側で。

あんな……あんな、動物みたいに無防備な姿を、世界に向けてさらけ出しているなんて。

そのあまりにも深い断絶が、広瀬の脳内に火花を散らせた。

彼女が前に掛けている『フォレストコーヒー』のエプロン。会社から支給される糊のきいたシャツ。その薄い布地の向こう側に隠されているはずの、あの「真実」の残像が、現実の彼女の姿と重なり、溶け合っていく。

広瀬は立ち尽くしたまま、逃げることも目を逸らすこともできず、ただその背中を、食い入るように見つめ続けていた。

目が離せない。

彼女の一挙手一投足に、全神経が病的なまでに集中していく。テーブルにカップを置く時の、しなやかな指先の動き。客に話しかける際に口角を上げる、計算された微かな微笑み。

ふと、他のスタッフに何か指示を出している様子が目に入った。その責任感の強そうな横顔。全てが新鮮で、そして同時に、あの映像の断片が頭の中で勝手に重なり始める。

透明な声と、排泄の時の吐息。そのギャップに、ゾクゾクとする粟立ちが全身を駆け抜けた。いけない……耐えられない……。

膝の上で握りしめた拳に力がこもる。必死に自分をコントロールする。

こんな不純な、汚い目で彼女を見てはいけない。中村さんはただ、時給のために、責任を持つて仕事をしているだけだ。彼女は何一つ悪いことなんてしていない。

それなのに、自分は。

この清潔なカフェの空気の中で、一人だけ異物のように、こんなにも穢れたフィルターを通して彼女を解釈している。

「……っ」

胸が熱い。

彼女がトレイを持って、こちらの方へ向き直ろうとした。そのスラックスの、腰から太腿にかけてのラインが、歩みに合わせてピンと張る。

昨日、網膜に焼き付いた、あの記憶が、目の前の清潔な制服姿を無残に侵食していく。

広瀬は、自分が這い上がることでできない沼に足を踏み入れていることを自覚しながら、その底知れない興奮から、どうしても目を逸らすことができなかった。

やっと、その瞬間が訪れた。

おそらく休憩明けだろうか、中村さんがフロア係の担当から離れ、カウンターの方へと歩いていくのが見えた。他の若い男性店員に軽く会釈をしながら、ポジションを替える。その一挙手一投足が、広瀬の視界の中では妙なほどスローモーションに引き延ばされ、心臓が鼓動を速めるのを止められない。

今だ。チャンスだ。

カウンターの正面、広瀬がちょうど中村さんの目の前まで来たその時、ふいに視線がこちらを捉えた。

「……っ」

一瞬、彼女の眉がわずかに寄る。やや怪訝そうな、探るような表情。

完全に、視線が合った。

「……いらっしやいませ」

鈴を転がすような、澄んだ声。声を聞くことができた。

あれ、この人、さっきまでフロアでコーヒー飲んでた人じゃない……？ 何……？ 追加なの？

そんな戸惑いの色が、彼女の瞳の奥に微かに浮かんたのを広瀬は見逃さなかった。

いつもと全く同じ声。なのに、なぜか今日は、耳元で囁かれるような、堪えがたいほど艶めいた響きを伴って聞こえてくる。

……やばい。

広瀬は咄嗟に、逃げるように視線を落として俯いた。今ここで、興奮を宿した顔が、彼女の記憶に深く刻まれてはいけない。

彼女を見つめる広瀬の視界の端で、七分丈に折られた袖口から細い腕が伸びていた。男とは明らかに白さも太さも違う華奢な腕。そこから発せられる「女」の気配が、昨日見たあの映像と重なり、熱っぽい回想を呼び起こす。

「……ご注文ですか？」

重ねて問いかける彼女の声。

広瀬は喉の奥で詰まりかけた息を、震える声でどうにか絞り出した。

中村さんは、いま目の前にいる男が昨日、彼女の最も深い部分を、恥部を――あの黄色い尿と、歪んだ表情を――何回もリピートして貪り尽くした男だとは、夢にも思っていないだろう。

その圧倒的な格差が、想像をこれ以上ないほどに研ぎ澄ませていく。

彼女はマニュアル通りに問いかけながら、手際よくカップを取り出している。

伏し目がちな横顔がそこにある。長い睫毛が、白い肌に影を落としている。動画では見られなかった角度からの、生身の彼女の顔。

細い首筋の、脈打つような微かな震え。白い制服のシャツをきっちりとインした腰のくびれ。そこからスラックスに包まれて伸びる、細くしなやかな脚。

全部……全部見たはずなのに……。

昨日、あのモニターの中で、彼女のすべてを堪能したはずだった。なのに、目の前の「現実」は、さらに強烈な質量を持って広瀬を圧倒する。

「……あの。ホットコーヒーを、一つ」

潰れたような声でどうにか注文を伝える。

不意に、彼女が動いた拍子に、仄かにシャンプーなのか香水なのか、清潔な香りが鼻先をくすぐった。

これが……中村さんの、本当の香り……。

あの無機質な映像にはなかったリアルな五感が、ダイレクトに広瀬の脳を揺さぶる。

その背中。その足取り。すべてが、広瀬を底なしの沼へ引きずり込むために計算され尽くした罠のようにさえ思えてくる。

喉がカラカラにかわき、唾を飲み込もうとしても、舌が上顎に貼り付いて動かない。

彼女の指がコーヒーのカップに触れるたび、あの映像の中での指使いが鮮烈にオーバーラップした。音消しセンサーを操作する時の、手首の角度。しゃがみ込んだ時に強調されていた、臀部の肉感的な丸み。両足に力を入れて深く沈み込む姿勢。

「……お客様？」

中村さんが少しだけ眉を上げて、こちらを覗き込んだ。

そこには、いつもの親切な「店員としての笑顔」とは少し違う、不審者を警戒するような、冷やかで職務的な表情があった。

その拒絶に近い表情に、広瀬はゾクリとした快感を覚えた。

これは仕事上の彼女の顔ではなく、女としての警戒感が不意に出てしまった、素の部分だ。その警戒は正しい。広瀬は知っている。

この人の、本当の、剥き出しの顔を。

恥ずかしい行為を。

見てたんだぞ。おしっこするところまで、全部……。

頭のなかで濁った声が、何度も、何度も反芻される。

誰も知らない彼女の深淵を、本人以外では、この中年男だけが知っている。

特権的ともいえる、口に出せない秘密を抱えているという気持ちだが、広瀬の理性をさらに甘く、激しく蝕んでいった。

おしっこどころか。ウンコまでしてたんだよな。

なのに実物は、やっぱり……可愛い……。悔しいくらいに。

あまりの落差に眩暈がした。広瀬は慌ててメニューを指差し、声が上擦らないように、四十歳の分別ある大人を必死に演じて平静を装う。

「……追加で、サンドイッチもお願いできますか」

「ご注文はどちらのサンドイッチにされますか？ B L Tに、サーモンとクリームチーズ、ローストビーフの三種類がありますが？」

何でも良いのだ。ただ、もう少し中村さんの声を聞いていたい。それがすべてだった。

「B L Tサンドで」

「ハイ。ベーコンとレタス、トマトのBLT。」

彼女の返事が、どこか機械的に聞こえた。

いつもなら、もう少し、丁寧な接客だったはずだ。今は、事務的な冷ややかさを帯びている気がした。被害妄想か、あるいは、広瀬の瞳の奥に潜む濁った熱を、彼女が本能的に察知したのか。

「それ、おいしいですね。私も大好きです」

中村さんは、つい今しがたの冷たい応対を少し反省したのかもしれない。マニュアル通りの接客に加えて、オリジナルな感想を語った。また声を聞いた。

会計を済ませる間も、彼女の指の動きから目が離せない。

細くて、透き通るように白い指が、レジのキーボードを軽やかに叩き、広瀬の差し出した千円札を受け取り、小銭を丁寧に数える。

その一挙手一投足が脳内でスローモーションに変換され、あの映像の残像と重なっていく。

ああ……この指で……。股を……お尻を、拭いたんだね……。

「お待たせしました」

沸きあがる妄想を振り切って、広瀬はトレイを受け取った。彼女に背を向け、元々座っていた隅の席へと戻る。

椅子に腰を下ろしても、心臓は未だに早鐘を打っていた。

手元に置かれたBLTサンドイッチには目もくれず、視線をわずかに横へ滑らせる。

そこには、次の業務に取り掛かるため、カウンターの途中で忙しなく働く中村さんの姿があった。

お金を数えオーダーを通し、客にお礼を言う。

中村さん……。

その清楚な横顔を見つめながら、広瀬は、自分のポケットの中にあるスマホを意識した。あの動画はスマホでも見ることができる。手の中に、彼女の秘密がある。

そして、目の前には、何も知らない彼女がいる。

この「二人の中村さん」を同時に味わえる至福の苦しみに、広瀬はまだBLTサンドには手をつけずに、コーヒーカップに口をつけた。

店に来てから一時間が経とうとしていた。コーヒーの表面は、天井の灯りを反射させている。本来ならとくに店を出て、明日からの工場勤務に備えて体を休めるべき時間だ。

……もう少し、中村さんを見ていこう。カップの縁を指でなぞりながら、広瀬はその決断を下した。いや、それは決断というほど高尚なものではなかった。ただ抗いような重力に魂を引かれていた。

その時、広瀬の心の内に、一つの禍々しい言葉が浮かんできた。

「視姦」

その言葉の暴力性に、広瀬自身が一瞬だけ怯んだ。四十年間、犯罪も犯さず、表彰もされずに、ただ生きてきた広瀬が、今、目の前で懸命に働く一人の女性に対し、心の中でその忌まわしい行為を働いている。

彼女の仕事の流れ、シャツ越しに透ける背中のライン、客に向けて整えられた声音。そのすべてを、広瀬は昨日見たあの「排泄動画」というフィルターを透かして、執拗に舐め回している。

彼女がトレイを下げ、腰を屈めるたびに。彼女が忙しく動き、額に薄っすらと汗を浮かべるたびに。広瀬の脳内では、あの和式便器に跨り、放尿していた「もう一人の中村さん」が、鮮烈に上書きされる。

今、彼女の肉体で起きている脈動、筋肉の収縮、時折聞こえる声、吐息のすべてを、広瀬は動画の記憶と結びつけ、視線で蹂躪し、陵辱していた。

ごめん、中村さん……。でも、俺はもう止められないんだ。

自分の欲望の歪みに吐き気を覚えながらも、否定しようのない熱い疼きが居座り続けている。彼女は、自分が今この瞬間、一人の冴えない中年の客によって、魂の貞操を、視線で犯されていることなど、夢にも思っていない。その無垢な無防備さが、視姦という名の暴挙を、より一層、甘美で残酷な快楽へと変質させていった。

追加で頼んだコーヒーを一口啜る。苦みの強い香りが鼻腔を抜け、喉を通るたびに、興奮した頭を鎮めてくれるようだ。

中村さんは相変わらずテキパキと働いている。手際よくオーダーを取り、時にはキッチンスタッフにも的確な指示を出している。その姿はまさしく、このカフェのブランドを背負った「仕事ができる店員」そのものだ。

カウンター内で、彼女の無駄のない動きに見惚れていると、ふと彼女の表情が劇的に変わるのが見えた。

さっきまでマニュアル通りの柔らかな笑顔で接客していた彼女が、急に険しい顔になり始めたのだ。視線の先には、まだ仕事に慣れない感じの若い男性店員。おそらく新人だろう。コーヒークップを手になっているが、手元が完全におぼつかない。

中村さんは、獲物を見つけた肉食獣のような鋭さで、さっと足を進めて青年のそばへ詰め寄った。

「ねえ！ 佐藤くん！ ちょっと！ それ、どうするつもりなの？」

カウンター内を一瞬で凍りつかせるような、低く鋭い声だった。

カウンターの端で立ち往生していた後輩バイトー佐藤くんは、ビクッと肩を跳ねさせ、手に持っていたカップを危うく落としそうになった。

中村さんは、豹のような、しなやかで冷徹な足取りで彼に詰め寄った。

「そのカップ、温めてないでしょ？ マニユアル読んでないの？ お客様にぬるい飲み物を飲ませるつもり？」

「す、すみませんっ……！ わからなかったもので……」

「言い訳はいいの。前にも教えたよね」

中村さんの眉間に、深い縦皺が刻まれる。

さっきまで客に見せていた、丁寧な姿勢はどこにもない。そこにあるのは、ミスを犯した弱者を徹底的に指弾する、苛烈なまでの教育者の顔だ。

「……やり直してよね。今すぐ。次やったら、店長に報告するから」

突き放すような冷たい言葉。

佐藤くんは青ざめた顔で「はい……」と消え入るような声で応じ、震える手で作業に戻った。

広瀬はカウンターの隅で、冷めたコーヒーを啜りながら、その光景を食い入るように見つめていた。

叱責する彼女の薄い唇。怒りに微かに震える、白いシャツに包まれた肩。そして、厳しい言葉を吐き出すたびに上下する、その細い首筋。

……いい。すごくいいな。

広瀬の中で、悦びがシュワシュワと泡を立てて膨れ上がっていく。

彼女の潔癖さ。マニキュアルを守る先輩バイトとしての立場。それに基づき他人を容赦なく裁く、気の強さ。

それが、あの動画の中で、生理現象に身を委ね、何とも言えない表情で脱糞していた姿と、あまりにも鮮やかなコントラストを描き出していた。

厳しい言葉を吐いている口が、あの時は……。背筋が、あの時は、和式便器を跨いで無様に丸まっていた。

……ははっ。

場違いな笑いが漏れそうになった。

中村さんがどれだけ他人に厳しく当たろうとも、知っている。一人になった時、どんなに無防備で、どんなに恥ずかしい姿を晒しているのかを。

その秘密を握っている自分だけが、このカフェの中で、彼女よりもずっと高い場所に君臨しているのだ。

「結局フォローされることになるんだから。分からないことは、やる前に必ず確認してね。二度と同じ失敗をしないで。分かった？」

畳みかけるような激しい言葉。青年はもはや声も出ないのか、「はい……はい」と、青ざめた顔で何度も何度も頷くことしかできていない。

「あと、洗い場のシンク。朝の開店準備のとき言ったけど、汚れが落ちきってなかったよ。もう一度きちんと磨いて」

中村さんは視線すら合わせず、吐き捨てるように追撃を加えた。

その横顔には、出来の悪い後輩への苛立ちが隠しきれずに滲み出ている。

……すごいな。これが、あの中村さんの本性なのか。確かに綺麗な顔をしていて、気も強そうだと感じていたが。

広瀬は残り少なくなったコーヒーを啜る体でカップの縁に口をつけながら、その苛烈な光景を網膜に焼き付けた。

工場の作業でミスをすれば怒鳴られる。それは日常茶飯事だ。だが、彼女のそれはもっと質が悪いのではないか。先輩バイトという圧倒的に優位な立場からの、的確で、冷徹で、それでいて相手の尊厳を、薄く、薄く削ぎ落とすような、静かな暴力。

「佐藤くん、聞こえてるの？」

「は、はい……すみません、すぐ洗ってきます……！」

「あなたがいない間、カウンター、私だけになるんだから！早くしてね」

さらなるダメ出しから逃げるように洗い場へと向かう佐藤くんの背中を、彼女は氷のような眼差しで見送った。

そして、ふっと小さく溜息をつく。

その瞬間、広瀬の脳裏には、あのトイレの個室で、踏ん張るために握りしめられていた彼女の拳がフラッシュバックした。

今の、他人を無能として切り捨てた潔癖な彼女。水垢を許さない、その清潔感。それが、女子トイレの個室の中で、ウンチをしていた姿と重なり合う。

ギャップがすごい。面白い……面白すぎるよ、中村さん。

他人に厳しく命じるその口が、あの時は、生理的な現象により締まりなく開かれ、吐息を漏らしていた。

「……っ」

ぼおっと下半身が熱くなる。

彼女が強く出ると、広瀬だけが握っている「裏の真実」の価値が跳ね上がっていく。彼女が後輩を罵倒するその高慢な言葉の裏で、広瀬の脳内では、あの破廉恥な映像が絶え間なくリピートされていた。

誰も知らない彼女の「汚点」を、広瀬だけがこのカフェで、別の角度から鑑賞している。

中村さんは、何事もなかったかのように淡々と自分のルーチンに戻っていく。

だが、彼女の視線は死んでいなかった。時折、自分の業務の合間に、青年の方を試験官のような鋭い目で射抜いているのがわかる。

意外だ……こんなに厳しいんだな……。

広瀬はカップに口をつけて、その光景を食い入るように見つめた。

工場の無機質な作業台で、ただ黙々と手を動かすだけの広瀬には、あんな風に他人に指示し、矯正しようとする意志の強さが眩しかった。

脳裏に、あの映像の残像がフラッシュバックする。

和式便器に深く屈み込み、自らの排泄物の匂いが立ち込める密室で、ただ一人の「動物」に成り下がっていた彼女。あの時、彼女は他ならぬ自分の体から出た、水垢よりもずっと「不潔」な汚物を、どんな顔で受け止めていたのか。

「店長にチクル」という本性の悪さ。

その彼女が、あの個室の床を見つめ、生理的な快感に身を震わせていた無防備な姿と重なり合う。

あれはハラスメントだよな……。パワハラだよ。

そう振り返った時、別の考えが浮かんた。

じゃあ、自分が彼女にしてることは何なのだ。セクハラか？ 視姦している。セクハラ以上に最悪なことだ。もっと人間や、尊厳に関わる、根源的な。

怖いくらいに、残酷なことだ……。

冷え切ったカップを握りしめ、広瀬は息を潜める。さっき後輩を裁いていたあの横顔。普段、カウンター越しに広瀬へ向けてくれる、あの笑顔との落差が凄まじい。

客である広瀬にはあんなに厳しい顔を見せてくれたことなんて一度もなかった。だからこそ、脳裏に焼き付いた「あの映像」の生々しさが、耐えがたいほど鮮烈に際立ってくる。

この場での彼女は、隙のない先輩だ。けれど、あの動画の中の彼女は、隙だらけの姿を晒していた。

それが、動かしようのない現実だ。

この現実の裏側に潜む、ドロドロとした彼女の真実を知っているのは、世界で自分だけなのかもしれない。それも含めての現実であることが残酷に感じられて仕方がなかった。

……なんでこんな、こんな気持ちになるんだ？

胸の内で、奇妙な感情が荒れ狂う。

彼女を汚してしまったという罪悪感と、彼女のすべてを剥ぎ取って掌の上で転がしているという、神にでもなったかのような傲慢な気持ち。その二つがせめぎ合い、広瀬の精神をじりじりと苛んでいく。

しかし、それでも視線を外すことができなかった。

中村さんは、広瀬の視線など微塵も意に介さず、次々と舞い込むオーダーを捌き続けている。接客業の基礎が染み付いた立ち姿。客と対面した瞬間に浮かべる、整えられた笑顔。

さっきまでの厳しさは、もはや影も形もない。まるで、場面ごとに仮面を付け替えているかのようだ。そのあまりにも巧みな、そして冷徹なまでの自己演出に、広瀬は恐怖に近い畏敬の念すら抱き始めていた。

「……っ」

広瀬は、乾燥して味のなくなったサンドイッチの最後のひとかけらを無理やり口に押し込み、底に溜まった冷たいコーヒーをぐいっと飲み干した。

もっと見ていたい。この「人間」と「動物」の境界線が溶け合う瞬間を、永遠に観察していたい。

だが、これ以上、何も注文せずに彼女を凝視し続けるのは、さすがに不自然だ。不審者として、あの冷たい瞳で認定されるわけにはいかない。

広瀬は名残惜しさを無理やり飲み込み、席を立つ準備を始めた。

しかし、広瀬の視線は、最後まで彼女の白いシャツの背中を、剥製を愛でるような執拗さで追いつけていた。

佐藤君に……あの動画を見せたらどうなるんだろう……。

ふと、狂気に触れたような馬鹿げた考えが頭をよぎり、背筋に冷たい震えが走った。

さっき、中村さんに完膚なきまで打ちのめされ、消え入りそうな顔でシンクを磨いていたあの新人。もし、彼が手の中に握られたこの「不都合な真実」を知ってしまったら？

今もカウンターの向こうで、誰よりも冷静に、先輩店員として振る舞っているあの店員の、最も無防備で汚辱に満ちた瞬間。それを、虐げられた彼に見せたとしたら。

……一瞬で、世界がひっくり返るぞ。

自分が握っているこの動画は、彼女の絶対的な「弱点」だ。彼女がどんなに偉くても、この数分間の映像一つで、彼女の立場も、社会的な信用も、女としての羞恥心も、すべてが音を立てて崩れ去る。

もしそれを公開すれば、彼女は社内的にも危うくなるだろう。そして、それを持っている広瀬もまた、犯人ではなくても、変質者として通報されるだろう。互いの人生が、抜き差しならない泥沼の中で心中するように破滅していく。

その、甘美ですらある破滅への誘惑。

これが……『窃視』の究極形なのか……？

さっきまでの凛々しい中村さんの姿。後輩を震え上がらせた厳しい指導。

あまりにも衝撃的で、残酷なまでに美しかった。けれど、その同じ彼女が、トイレの個室の中で、あんなにもなりふり構わず、動物的な生理現象に身を任せていたのだ。

ギャップどころではない。天国と地獄ほどの落差だ。

これは新たな、そして今まで以上にどす黒い欲望だ。

「見ている」だけではない。彼女の運命の鍵を、この四十歳の冴えない男が、誰にも知られずに握りしめ、誰にでも与えることができるという絶対的な立場。

広瀬はトレイを持ち上げ、席を立った。

返却口へ向かう途中で、一瞬だけ、中村さんと視線が交差した気がした。

彼女は相変わらず、隙のない店員の顔で広瀬を見送る。

中村さん……君は知らないんだ。俺が、君の人生を終わらせる爆弾のスイッチを、今、ポケットに入れて持ち歩いていることを……。

広瀬は口の端を微かに歪め、雨の降りしきる外の世界へと、ゆっくりと足を踏み出した。

「見せたら……あいつ、どんな顔をする？」

トレイを返却口に置きながら、広瀬の思考は制御不能な加速を始めていた。

まずは驚愕が先に立つだろう。間違はなく固まるだろう。次に軽蔑か？ いや、そんな高尚な感情は一瞬で吹き飛び、底知れない恐怖に変わるはずだ。自分が畏怖していた教育係の、あまりにも「生々しい」崩壊の姿。

自分の卑劣さに、喉の奥から酸っぱいものが込み上げてくる。

頭の片隅で、最後の良心がけたたましく警鐘を鳴らしていた。こんなことが許されるはずがない。警察沙汰になるかもしれない。中村さんの人生を破壊し、同時に広瀬という人間も社会的に抹殺される。工場の仕事も、これまで積み上げてきた僅かな平穏も、すべてが瓦解する。

だが、その破滅の予感こそが、最高に甘美な喜びに思えてならなかった。

積み上げてきたものをすべて叩き壊し、焦土にする瞬間の、脳を焼くような興奮。

どうせ、元はネットに流出していたものじゃないか。卑怯な言い訳が、次々と沸いてくる。

それに……佐藤君が俺と同じ性癖の持ち主だったら？　だったら興奮するはずだ。自分を罵倒した高慢な女が、実はあんな格好で、あんな顔をして、オシッコやウンコをしていたなんて知ったら……。

これは性癖なのか。いや、違う。そんな生易しい理由じゃない。性癖なんていう言葉で片付けられる代物ではなかった。

蹂躪であり、支配だ。

一方的に中村さんの深淵を掌握し、その絶大な「権力」を他者に分け与える。その行為を通じて、彼女を自分の掌の上で転がし、蹂躪の連鎖を作り出す。

四十年間、誰の記憶にも残らず、誰からも必要とされなかった自分が、今、一人の人間の運命を指先一つで、文字通り「スマホのタップ」一つで決定できる。

俺は……全知全能の神なのか？

でもやめておこう。

神と言うより、俺にはトイレの紙がぴったりだ。トイレの紙になって、中村さんに股間に押し当てられたい。それに近い距離で自分は、動画の中の彼女を舐め回したのだ、

蹂躪と支配は、自分の内面だけに留めておく。崩壊はいつでもさせることができるのだ。すべてを知った自分と、何も知らない中村さん。圧倒的に、自分が優位に立つ、この二人の関係の非対称性は、事件が起きれば、崩れてしまう。

夕方、このカフェを訪れ、夜には動画を視聴する。禁断の果実を、日々味わい、少しずつ損ねる選択を広瀬はした。

雨の降りしきる店外へ一歩踏み出した瞬間、駅構内の冷たい空気が頬を打った。

しかし、異様なテンションで、心臓は誇らしげに、権力者のような力強い鼓動を刻んでいた。背後の自動ドアが閉まる音。

その向こう側で、何も知らずに時給で働く中村さんの姿を想像するだけで、広瀬は雑踏の中、誰にも気付かれない不気味な笑みを深く、深く、刻みつけていた。

第三章 五十万円

二ヶ月前。

広瀬亘の日常は、自らが立つ工場の作業台のように、代わり映えのしないものだった。

電子機器メーカーの工場勤務。耳に残る機械音。作業着に染みついた油の匂い。四十歳。独身。家へ帰ったところで、待っている人間はいない。

朝起きて、仕事へ行く。働いて、帰る。食べて、寝る。そして、また朝になる。その繰り返しだった。

何か大きな不満があるわけではない。借金があるわけでもなければ、明日の食事に困っているわけでもない。

ただ、自分が今日ここにいたという事実が、翌日には何ひとつ残っていないような気がした。工場では、広瀬が休んでも、一部が遅れるだけだ。スーパーで買い物をすれば、レジの店員は数秒後には広瀬の顔など忘れる。電車の座席に座っていても、隣の人間にとって広瀬は、ただ場所を取っている中年男でしかない。

自分がいなくても、世界は寸分変わらず回っていく。そんなことを考えるようになった頃だった。広瀬が、インターネットの片隅にある妙なサイトへ辿り着いたのは。

最初は偶然だった。

サムネイルを見た。無料で閲覧できる短い映像をいくつか見た。

どこで撮られたのかも分からない。映っている女性の名前も、住んでいる街も分からない。

分かるのは、そこが女子トイレの個室の中で、本人が撮影されていることに気付いていないらしい、ということだけだった。

「……えぐいな」

最初に口から出たのは、そんな言葉だった。

ならば画面を閉じればよかった。通報すればよかった。

だが広瀬は、次の動画を開いた。そして、その次も。

いけないものを見ている。なにしろ女子トイレだ。トイレほど、プライバシーによって守られなければならない空間はないだろう。そうした認識が、広瀬を画面の前へ縛りつけた。

普段なら絶対に見ることのできない他人の秘密。誰にも見られていないと思っている異性の表情。

そこに、自分だけが一方的に入り込んでいる。

その感覚が、ひどく危険で、同時に抗いがたかった。

数日後、無料で見られる範囲では物足りなくなった。さらに奥へ進むためには、会員登録が必須だった。表示された金額を見て、広瀬は一度ブラウザを閉じた。

五十万円。

「高すぎるだろ……」

口に出して笑った。そんな金があれば、何でもできる。毎日居酒屋で酒盛りができる。車の頭金になる。旅行にも行ける。貯金しておけば、いつか何かの役に立つ。

翌日も仕事中、その金額が頭に残った。

五十万円。

馬鹿げている。

そう思えば思うほど、その先に何かあるのか気になった。

無料で見せているものが入口にすぎないのなら、その向こうには何がある？

一週間、迷った。

二週間目には、自分でも驚くほど具体的に預金残高を計算していた。

そしてある夜。広瀬は何度も入力し直した決済画面を前に、長い間マウスを握っていた。

「……何やってんだ、俺」

それでも最後には、クリックした。

五十万円。

広瀬にとっては、笑って払うことのできる金額ではなかった。

画面に会員登録完了の文字が表示された瞬間、胃の底が冷たくなった。

取り返しのつかないことをした気がした。

だが、その感覚は長く続かなかった。

会員専用ページには、これまで見られなかった大量の映像が並んでいた。

撮影された場所も、時間もばらばらだった。

見知らぬ場所。見知らぬ女性。

広瀬は夜ごと、それらを眺めた。最初のうちは、一つダウンロードして映像を開くたびに心臓が鳴った。

自分が決して入ることのできない他人の時間を、金を払ったというだけで覗いている。

俺、こういう性癖があったんだな。女の恥ずかしいところを、トイレを俺は盗み見したかったんだ……。

その背徳感に痺れた。

だが、人間は慣れる。

一週間。二週間。一ヶ月。

映像の本数が増えるほど、一つ一つの顔は記憶に残らなくなった。

見終われば、次。また次。どこかの誰か。知らない女。

昨日見た女と、今日見た女の区別さえ曖昧になる。

ある夜、広瀬は動画を途中で止めた。

「……誰なんだろうな、この人」

呟いてから、自分でも妙なことを言っただと思った。

誰でもいいから見ていたはずだった。名前など知らなくていい。住んでいる場所も知らなくていい。それなのに何か物足りない。

画面を閉じれば、それきり二度と会わない人間だからだ。映像の中ではどれほど無防備でも、翌朝には広瀬の世界から完全に消えている。そこにいるのは、生きている人間というより、一つの性的映像だった。

広瀬は暗くなった画面に映る自分の顔を見た。

「知ってる人だったら……違うのかな」

誰に聞かせるでもなく、そんな言葉が漏れた。

たとえば。毎朝、駅ですれ違う誰か。いつも利用する店の店員。顔だけは知っているけれど、向こうはこちらを覚えていないような誰か。

そんな人間が、この画面の中に突然現れたら。翌日、その本人と街ですれ違ったら。どんな気分になるのだろう。

「……いや」

広瀬は小さく首を振った。

「そんな偶然、あるわけないか」

全国のどこかで撮られた、名前も知らない人間たち。この世界と、自分が暮らす世界。

二つは決して交わらない。だからこそ、見ていられるのだ。

そう思っていた。

それからしばらくして、広瀬は新着動画の一本に、『フォレストコーヒー』のユニフォームを認めた。

第四章 古閑はるか

仕事帰りの広瀬は、喉の渴きを癒やすために駄構内のコンビニへと吸い込まれた。

LED照明が、陳列された商品を平坦に照らし出している。レジに並ぶ広瀬の視界に、ふと、一人の女性店員が飛び込んできた。

……え？

広瀬の心臓が、まるで警報機のように激しく鳴り始めた。

あの人……。

毛先の揃ったボブカットの黒髪。前髪はパツツンぎみ。目鼻立ちがはっきりとした、一見すると人当たりが良さそうなのに、その実、性格は強気そうな顔立ち。まつ毛も上を向いていて、左右の眉はキツと斜め上に、鋭い意志を感じさせる角度で描かれている。

見たことがある……？

身長は百五十二センチほどで、やや小柄。大きな瞳と、清潔感のあるヘアスタイルで、この実務的なコンビニ店内では眩しい存在感を放っている。

間違いない……あの動画の……！

それは、数日前に例のダークウェブから手に入れた「新作」の主演だった。

和式便器を跨ぎ、そのはっきりとした目鼻立ちを露わにしていた、あの女。

パーソナルなスペースに土足で侵入されたことなど露知らず、普段通りに用を足していた「被害者」が、今、目の前でペットボトルのお茶のバーコードを読み込んでいる。

ここにいたのか。

「百八十七円になります。……袋はどうされますか？」

彼女の、ハキハキとした、どこか事務的な声。

動画の中とは違う「表向き」の声音。

ああ……本物だ……。本当に、ここにいたんだ……。

「袋はいいです」

「いります？　いらないですか？」

「いいです」だどっちにも取られるな。

「いらないます」

「じゃあ、このままお渡ししますね」

「お支払いはどうされますか？　ペイペイですか？」

「……いや、現金で……」

財布のなかの小銭を掴もうとするとガタガタと震えだす。

孤独を極めた人生だ。同僚以外に知人など一人もない。けれど、今の広瀬にとって、目の前の彼女は親兄弟よりも、どんな旧友よりも深く、その「芯」までを知り尽くした存在だった。

彼女が気合を入れてメイクをした顔の裏側を、彼女が一番隠したかったはずのあの瞬間を、自分はずでに鑑賞し、弄んできたのだ。

「……っ」

広瀬は、彼女に悟られないようさりげなく視線を伏せ、小銭をトレイに置いた。

ドクドクと、耳の奥で自分の鼓動がうるさい。

現実と非現実の境界が、レジカウウンターのこちらと向こうで、どろどろとした欲望と共に溶け合っていく。

彼女は、目の前に立つ冴えない中年男が、自分の人生を根底から覆すような秘密の目撃者であることに、微塵も気づいていない。

その圧倒的な情報格差が、広瀬の脳内を、狂おしいほどの興奮と、逃げ出したくなるような戦慄で満たしていった。

レジの機械を操作する、無駄のないキビキビとした動き。その動きと、彼女の眉は、コンビニで「きちんと働く人間」としての模範のようだった。

広瀬はその裏側を知っている。

この百五十二センチの小柄な身体が、あの密室でどのように屈み、どのような光景を見せたのか。彼女が見せている「表の顔」が、あの、見せてくれない動画の中ではないかに違っていたか。

この人が……あの……。

視覚に焼き付いた映像の残像が、目の前の現実にはノイズのように重なる。

彼女のまとうコンビニの制服、バッチリと決まったメイク、そして客に向けられる視線。その全てが、広瀬にとっては剥がれかけの薄い「皮」にしか見えなかった。

「ありがとうございます」

彼女のよく通る声が、広瀬の背中を見送る。

店を出た瞬間、広瀬の膝はガクガクと笑っていた。

画面の向こう側の出来事ではない。現実が牙を剥いて彼に迫ってきたのだ。

中村さんだけではない。自分の行動範囲の誰かが、あるいはこれから知ることになる誰かが、あの深淵に突き落とされている。

その確信は、広瀬の胸のうちに、恐ろしいほどの恐怖と、それを遙かに上回る濁ったものを、かつてないほど激しく燃え上がらせていた。

アパートの自室に帰り着くやいなや、広瀬は上着も脱がず、PCの起動ボタンを押した。画面の光が暗い部屋を切り裂く。電気をつけ忘れていたので、完全に立ち上がるまでの間によりやく部屋を明るくする。そして馴染みの深い、しかしおぞましい階層の奥底へと導かれる。

マウスを握る手は、先ほどのコンビニでの余韻を残すかのように、小刻みに震えていた。

「これだ……」

ファイルを開き、あの「作品」を再生する。画面に現れたのは、先ほどレジで広瀬に商品を渡した、あのボブカットの女性だった。

正面から据えられたカメラは、彼女の顔を申し訳ないほど鮮明に捉えていた。バツチリとエクステを盛り、キツと斜め上に描かれた美しい眉。バイト先という公の場に立つために施された、非の打ち所のない「武装」としてのメイク。その美しい顔が、今、和式便器を跨ぎ、生理的な解放の時間のさなかにある。

……ああ。

広瀬は食い入るように画面を見つめた。

※ここまでお読みいただき、ありがとうございます。体験版はここまでとなります。
この先、広瀬は古閑の『裏側』を知り、さらに別の女性たちへと視線を広げていきます。
「本人は何も知らない。けれど、自分だけは知っている」

この先から、本作の倒錯はさらに深くなっていきます。続きは有料版でお楽しみください。